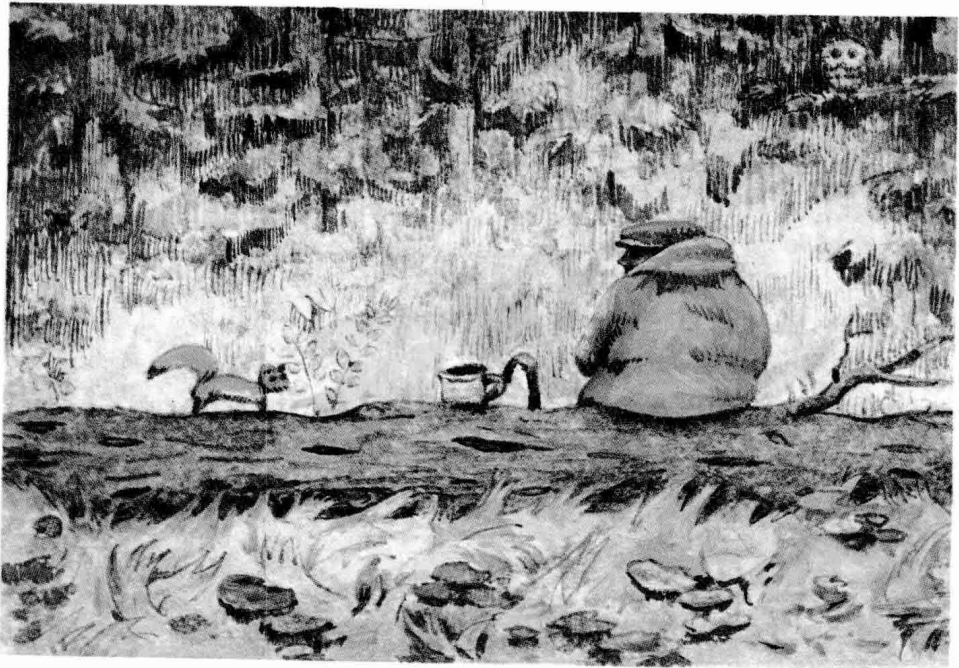


山でー油

辻 まこと



1975 創文社刊

辻 まこと	山 からの絵本	(税抜) 3200円
串田 孫一	随筆集 夜空の琴	2500円
串田 孫一	随想集 雲の憩う丘	2800円
尾崎 喜八	名もなき季節	1000円
庄野 英二	スキーナ河の柳	1500円
山口 耀久	烟 霞 淡 泊	1000円
宇都宮 貞子	たんたん滝水	2500円

尾崎喜八・深田久彌・串田孫一・畦地梅太郎・内田耕作 編集

* *

- 1 創刊号・山と私・忘れ得ぬ山・終刊号
- 2 深田久弥遺稿増大号・アルプ教室・尾崎喜八・辻まこと
- 3 山小屋・山で会った人・小さな山・山の仲間・山小屋II・頂き
- 4 牧場・峠・森・道・高原・山村
- 5 夜・朝(10周年記念特集)・湖・憧れ・メルヘン
- 6 山の博物誌・道具・木・溪谷・花
- 7 岩・谷・雨・風・雲・雪
- 8 山の本・春の増大号・季節・山のABC・山のABC地名編

✱ ✱
✱

山
で
一
泊

目
次

山上の湖畔
 旅はみちづれ
 無風流月見酒
 奥武蔵非推奨コース
 ヤマノヒト或いは風来仙人のこと
 小屋のいのち
 横手山越え
 出発
 頂上
 林間尾根
 ダマシ平
 芳ヶ平の小屋
 谷間の路
 鬼怒沼山
 山中暦日

全 九 共 四 三 七 六 六 五 五 三 三 一 五

根名草越え

金精峠

温泉岳・念仏平

根名草山頂

天狗岩・手白沢ヒュッテ

けもの捕獲法

絵はがき

幕岩

狩人の秋

そらみみ

山の宿

コテン観賞

滝

沈澱

風

壺

六

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一六

一九

二三

二七

三〇

三三

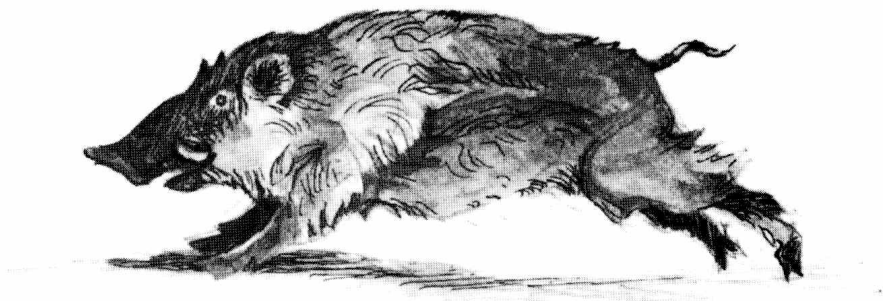
三四

木こり
演奏会
あとがき

題字
挿画
辻まこと

二五
二六
二六

山上の湖畔



だれでも知ってる著名な湖だが、かりに〇湖としておこう。山頂にある火口湖だ。摩周湖ほど幽邃ではない……どころか最近は大レジャーセンターとなっていてらしい。

というのは、私は戦後そこへいったことがないからだ。ところが先日、その住人のEにあった。Eは若い頃の山登りとスキーの仲間の一人で、その湖畔でいちばん古い貧乏旅館の長男だった。貧乏なのは旅館の主人ばかりではなく、女中も下男も皆貧乏。神主も売店のオヤジも貧乏だし、牧場の爺さんも馬追いも貧乏。

— 毒消しや、いらんかねえ

ときた越後の薬売りの娘を

— 腹のへった俺になに毒消しがいるもんだ

とばかり怒りにまかせて撲殺し、薬をのむ前にその肉を食って骨をカマで焼いたが、結局つかまって刑務所へいった炭焼きなどは、大貧乏だったにちがいない。天然氷のHは、元手いらずで定収があるといわれ、おおいに皆にうらやまれていたのに会うといつもゼニのない愚痴をこぼしていた。たまさか訪れる客といえ私のとき貧乏人ばかりだったから、山上は皆貧乏これみなは当然だったのだ。

ところがである。Eの話によれば山の上は今では皆金持に変わったのだ。Eの旅館は鉄筋コンクリート六階建て、本館、別館、貸別荘、レジャーパーク、レストランと兄弟皆社長みな。往時、青鼻汁を垂らして



— なんてってケンカで強いのはアンチャンだ

とくつつき回っていた末弟のRでさえ、バンガローの社長で、現在ヨーロッパへ旅行中というわけだ。天然氷のHの息子はモーターボートの元締めで、牧場はいまではゴルフ場だそうだ。

アッと驚くツジマコトの肩をポンと叩いて

— まアゆっくり飲みながら話そう

とEが連れていってくれたレストランだかナイトクラブだか判らない店は、いったい東京にこんなところがあったのかと田舎者よろしくこっちがキョロキョロするような派手なところで、国籍不明の男女がテレビか映画みたいな顔付きで集まっているところだった。

— ツジさんちつとも変わらないなア

といわれても、オセジをいわれたのか軽蔑されたのか全くわからない。しかし、たしかに彼ら山上のひとびとからみれば、私は旧体を保持している珍妙な存在だったろう。

滅多に顔なぞ洗わなかったから、紅顔とはいえなかったろうが、確かに私だって、その頃は小遣いがないなくても、朗らかな少年だった。

山上湖畔には由緒ある神社があり、春秋に大祭があつて、かなり盛大に人が集まった。春の祭はたいというすら寒いものだが、秋はやたらにはえているツツジが燃えるようきれいだった。だがここの祭

に集まる人々は、神様のご利益や景色は二の次三の次で、祭期のあいだに開かれるバクチが目当てだった。

昔々からのしきたりだったから、祭期中は山は治外法権で、嘘だか本当だかわからないが、日本中のバクチ屋の親分が集まるということだった。

ともかく、湖畔の宿や売店には眼つきの鋭い連中がうろうろし、昼夜の別なく酒盛りがつづく。祭日が終りに近づく、負けてスッカランになった連中が、湖畔に焚火をして野宿するようになる。夜Eの家から眺めると対岸に十指を屈してなお余る焚火が見え、湖面に映って美しい。が、野宿している人にとっては美しいどころではなかったろう。

—そろそろ荒神さまの出番がまわってきた

と土地の者はいう。そして出入口や戸棚の錠を嚴重に掛け、盗難にそなえる。

フエスタ・カプリチオの最後はいつも、打楽器と口論の大合唱で終わる。かくて神社は氏子からテラ銭（というのは変だが）の利益をうけ、氏子は神社のご守護に感謝する……という次第だった。

祭のあいだは山のいちまきは絶対にバクチをやらない。もちろん多忙でやってるヒマもないのだが、それだけではなく、その期間はやってはいけないきまりがあるらしかった。それを犯すと山上から追放される……とEはいていた。

冬になると麓の町からは見えなくても火口壁の森を一步内へ下れば雪があった。私たちは山へ兎を射

ちにいたり、スキーをしたりして忙しかったが、大人たちは何もすることがないらしく、焼酎を飲んでバクチばかりしているようにおもえた。そのバクチには他所者はぜったいにいれてもらえない。これまた不文律があったが、たまたま博奕の才ある客がブウブウいつているのをA旅館の炉ばたで耳にしたことがある。

毎日の勝負が、それぞれのところで賑やかな話題を提供しているので、皆たいくつはしない。

勝っても負けても山の上の金は湖の周囲をぐるぐる回っているだけで、下界へ落ちていくことはないのだから誰でもいつかは運のめぐってくることもあるわけなのだが、それでも一向に芽のでないものいつも強いものがあるらしかった。

ある年の冬、私はスキーをかつてEのところへ行った。末は日光の白根に続く山稜をツアーしようと五人ばかりの同勢で出掛けることになり、私は売店へ食糧を買いにでかけた。売店は三軒あるが、峠を下りて湖畔につき当たるところのK夫婦の店が、いちばん大きいから、そこへいった。

Kは四十歳ぐらいの小柄なハゲ頭の男で、妻君の方は小肥りで眼尻のつり上がった三十五、六のきつい女だ。東京をでるときもらった金が二十円、折目のない出来たてのホヤホヤの十円札を二枚スケッチブックの間に挟んで持っていたその一枚をだして、カン詰やスルメやチョコレートを買った。おかみさんはその札を

—ピンとしてるね？ ニセじゃあんめえナ

とうれしそうに引出しにしまい込んだ。

翌日は風もない上天気で、元気にかけた。日光まではいけなかったが、K岳のてっぺんで盛大な焚火をしてご馳走をたべ、湖畔に戻った。

その晩十時頃Eの部屋で靴下の穴を修理していたら天然水のHのおかみさんが私を訪ねてきた。玄関からこないで、窓をホトホトと叩いてきたのだ。

内緒のことで相談がある。ここからそつといれてくれという。Eと私は顔を見合わせた。部屋へはいってからもモジモジしてなかなか話を切りださない。

—なんですか？

と私がさいそくすると、おかみさんはEの顔をみてから両手を合わせ、彼に

—ごしょうだから内緒にしておくれ

と頼んだ。

—じつは……きのうあんたがKの店で使った十円札のことだが、あれと同じのをもう一枚持ってやしないかい。もしあったら妾に取りかえてくれないか、一円利子をつけてもいいがネ

—タッタ一枚もってるよ、取り替えてもいいが一体どういうわけだい？

—わけは話せないが、ごしょうだからこのことはダメってておくれ、でないと妾しゃオヤジにぶんなぐられる

—わけもいわねえでだまってる、取り替えろじゃ虫がよすぎるじゃないかとEが横からいった。

—まア損するワケでもないから

と私は十円札を彼女の前にだした。翌朝、いまはポート会社の社長になつて坊主がクサモチをもってきた。

その日、東京へ戻った。

—早く山をおりてよかったぜ

と、三月と一緒に北海道へいくために上京したEが私にいった。

—たいした十円札だったぜ。俺たちが山へ出掛けた日のことおぼえてるだろう。あの日の昼すぎに牧場の娘がKの売店へいって買物したんだ、新しい十円札でな、それが騒動のもだったんだ。

—一体どうしたってわけだ？　ちっともわからない
つまりこうだった。

Kのおかみさんは、自分がたしかに引出しにしまい込んだ十円札が、再び表から訪問してきたのでたまげたのだ。それから引出しをしらべたら、あった筈の札がない。牧場の娘というのは出戻りだが、すらり背が高く山中一の美人で、おまけにかなりのコケットだったから噂のたえまもない存在だった。

Kはおかみさんに取っ止められて、くすねた札はバクチで取られたと白状した。本当にバクチで取ら

れたかどうかをK夫人は聴きまわったのだ。そして、それが、対岸の売店のRの手に落ちたことを確かめて内心ホッとしたわけだが、こんどはR夫人がおさまらない。Rは、かねて借金のあったHに払ったといい、Hは確かに受け取ってうちのカミさんに渡したといった。

一方、牧場の娘はその十円を誰の手から受け取ったかが、問題であったが、彼女はそれがどこからきたかはもらさなかった。しかし皆は目下彼女に夢中の神主のオイに当たるJ青年にちがいないと見当をつけたのである。H夫人がもう一枚の十円札で虎口をのがれたのはまさに危機一髪という瞬間だった……とEはおかしそうに話した。

——しかし、山ではキミのことも噂になっていてね、アヤシイといってるんだ。こんだくるとジロジロみられたり質問されるかも知れないぜ

夏に出掛けるときは、それ相当のいいわけを用意していたが、いってみると、Eのうちの猫があまり年をとりすぎて、ついに化猫となった事件でみな夢中だった。

人間ではなかなかとれない湖のマスとその猫は毎晩一匹ずつとってきてA館の台所の板の間におき、納所の戸をあけてマスと交換に目刺しを一竿くわえて立ち去る芸当は、Eが仕込んだものだが、もうそんな簡単なことではなくなったというのだ。

Eの祖母が

——もうお前もあまりウチにすぎるから、どっかへお行き

といった日から姿を消したのはいいが、いろいろと怪異が生じてきたのだ。
その話については、いずれまた原稿料にしたいとおもってる。